

# 紀 要



## 博物館設立よもやま話

下津谷達男氏（元野田市郷土博物館長／元國學院大學栃木短期大學教授／野田地方史懇話会会長）

本講演録は令和元年度特別展「郷土史へのまなざし～博物館誕生のものがたり～」の関連事業として行われたミュージアムトーク「博物館設立よもやま話」を文字起こししたものである（展覧会の詳細は34～39ページ参照）。掲載にあたっては、講師の了承のもと、話の流れは変えずに内容ごとに項目を立てた。また、必要と思われる語句を（ ）で補ったほか、註を付した。

はじめに

下津谷でございます。どうもお天気が良い日にわざわざおいでいただきまして、ちょっと暗い部屋で申し訳ありません。お天道様の下でゆっくりと遊んでいただければよい時間だろうと思っておりますが、ありがとうございます。

田中則雄先生と樋口清之先生

今日、レジュメで最初に出しましたのは田中則雄先生<sup>(1)</sup>、ご存知の方もいらっしゃるんじゃないかと思いますが、町立野田高等女学校時代<sup>(2)</sup>、昭和21年、田中則雄先生が台湾からお帰りになりましてね、こちらに就職されたということです。東京の方なんです元々はね。で、台北帝国大学、昔のいわゆる東京大学、京都大学と同じように台北に帝国大学がありまして、その台北帝国大学へお入りになって。それで、インドネシアを中心とする南方の歴史を研究するということで、あちらでお勉強されたんですね、オランダ語を中心として。

田中先生おっしゃいましたけど、その頃学生5、6人で先生が10人以上、それで毎日宿題を出される。大変なことで、学生時代は台湾旅行なんて一度もしたことない。とにかく帰ればすぐ予習・復習ですね。あんなに勉強したことは今までなかった、ということをおっしゃっていました。

田中先生がこちらに奉職されまして、日本史を教えることになる。で、生徒さんに、あなたたちの家の周辺に土器とか石器とかそういうものがいろいろ落ちてるところがあるだろう、野田の場合、清水貝塚<sup>(3)</sup>が非常に有名ですが、

そのあたり行って、拾って持って来てくれと、夏休みの宿題で出したそうです。それで集まります。で、それをご覧になっても田中先生はよく分からない。分からないんですけども、いずれそれぞれの専門の先生に見ていただこうということで、学校で保管しておりました。

その頃、野田高等女学校は地域文化というもののは学校からというテーマを掲げましてね。文化講座を開いておったようです。その一環として、國學院大學の樋口清之先生<sup>(4)</sup>をお呼びして、お話を伺っていました。その内容は、お化粧の歴史ということで、非常に良いお話でしたと田中先生はずっとお亡くなりになるまで私に会いますとね、私はちょいちょい（田中先生には）会っておりましたが、おっしゃっておりました。

（樋口先生は）非常にお話が上手な先生ですから。学生時代から落語の研究をされたりして、間とかそういうものを色々研究されて、御自分の講義の中にもそれを取り入れていらっしゃいました。私の先生なんですけど、私は講義ノートは、樋口先生のノートを持ってないんです。ノートを取るより面白くて、聴いてばかりおりましたね。試験はありましたが、何とか通りました。まあ、とにかくそういうような先生で、ノートをとるよりは話を聴く方が面白いという先生で、非常に売れっ子だった先生ですね。

その先生をお呼びしまして、野田高校でそのお話を聞いて。樋口先生は学生の時の卒業論文は装飾だった。縄文時代の装飾、耳飾りであるとかその他いろいろな装飾品ですね。そういうものを専門に研究されたものですから、そういう意味ではお手の物のお話だったのでしょ。

そのお話を聞いた後で、生徒さんが集めた土器とか石器とかそういうものを展示しまして、樋口先生から色々説明をお聞きした。樋口先生、考古学の先生ですからね、それを教えてください。で、非常によかったということをおっしゃっていましたね。

#### 生徒の持ってきた破片から古墳を発見

昭和22年というのはね、実は登呂遺跡の調査が始まった時なんです。静岡市の登呂遺跡、これは非常に有名ですからね、ご存じとは思いますが、最近教科書の中から登呂遺跡が段々消えていきます。吉野ヶ里とか弥生の遺跡が大ききところがどんどん見つかるものですから、それでいつの間にか地盤沈下してくるということになります。そこで今回、登呂遺跡を再発掘しまして博物館展示を新しくしまして意気込んでやっているところです。私も今年の2月ここに呼ばれて、話をしてきました。

登呂が非常に有名になって、発掘ブームと言いましょかね、そういうものが出てきた時代ですから。ですから、田中先生がお集めになって、それを樋口先生にお見せする、これこれしかじかと説明をするをお聞きになっておますと、その中の1点に実は埴輪があったんです。

それは円筒埴輪と言いまして、古墳の周りにぐるっと立てる円筒形の埴輪です。その埴輪の破片がありまして、この埴輪を樋口先生がご覧になりました。大きな破片なのでこれは恐らくその古墳が何かの理由で掘られて、それでそこから出てきたものでしょう。この古墳へ行けばまだまだ埴輪はあるはずですよ、というようなことをおっしゃったそうです。

田中先生は、早速この埴輪を持ってこられた生徒さん、これは流山の方、お名前も私わかってますけども、ま、それは別として。生徒さんと呼ばしてね、聞いたら家の裏山です。家の持ち山です。家の持ち山にある古墳、2つばかりあると。そこで根っこを掘って、根っこを掘るといのは戦争中、松根油、皆さんご存じでしょうかね。松の油です。燃料が足りなくなって軍部が奨励して、あちらこちらで松を切っては根っこを掘らせる。それから油をとる。松根

油を取るためにあちらこちらでずーっと乱伐、それから伐根ですね。で、その家の山の方も、そのお子さんが言うには、家の山も伐根して、そのために埴輪が出てきたということで田中先生も現場を案内してもらって、これはいいなということを感じたんでしょう。それで、早速これを掘りたいと思ったそうです。しかし、まあ掘りたいといってもそう簡単に掘れるもんじゃありません。

#### 野田地方文化団体協議会の発足

そうこうしているうちに、丁度、野田地方文化団体協議会(文協)<sup>(5)</sup>を結成しようという相談会がありまして。野田高校も相談会に参加していたようです。その文化講座の関係があるんでしょう。それで、参加して色々話をしているうちに、古墳の話をしたところ、面白そうじゃないかという感じになりました。それを早速掘ろうじゃないかというようなことになる。文協が設立されたのが昭和23年かな。

23年に文協が設立されるんですけども、丁度その頃は、野田市教育委員会ができた。教育委員会というのは、始めのうちは必置じゃなかったんです。任意設置と言いましょかね。実際、昭和27年から必置になってきたと思えますけど。初めのうちは設置しても、しなくても宜しいと。野田町は25年に野田市となるんですが、野田には教育委員会を設置、早速作ろうじゃないかということで、手を挙げて23年から早速設置するのです。で、教育委員は公選です。選挙です。(町から指名で)選ばれるんじゃないかと選挙でございます。いろんな公約を訴えまして、選挙に出るんです。

文協の最初の仕事は、教育委員会の委員選挙のための広報活動をまずやるんですけども。また同時に、古墳の発掘というようなことになってくるわけです。啓発活動ですね。啓発活動をやりながら古墳の発掘をやってみようかなというようなことになったそうです。これは田中先生からお聞きしておりました。

#### 樋口先生との連絡係に

丁度その頃、私は國學院大学の予科の学生な

んです。昔の旧制の学部、大学は予科から学部へ行くコースと、それから専門部と言いましてこれは短いんですけども、いわゆる初めから専門に入ってしまう、初めから専門領域に入って3年間で卒業する。そういうのがあったんですが、私は予科に入って予科2年やってそれから学部に入った。旧制の高等学校、一高とか二高とか言ったりします、あれの代わりですね。

予科に入ってから学部というコースを採ったんですけども。田中先生はどこからかお聞きになったんでしょうね。それまで私は田中先生とは面識ないんです。で、夜私の家へ訪ねてこられて、これこれしかじかで、古墳の発掘をしたいんだと。ついては、最近樋口先生の講演を聞きながら土器・石器について、埴輪についてもお話を頂いたけれども、樋口先生にぜひ指導してもらいたい。発掘の指導をして貰いたい。あんた大学へ毎日行ってるんだから、ちょっと樋口先生の所に行ってみてまずその話をしてくれと。受けてくださるかどうか、その話をしてくれと。というようなことで、依頼されたんです。で、その時ね、田中先生面白いことをおっしゃるんです。条件と言うかな、ぜひこれだけは伝えてくれよと。私良く覚えておるんですけど、予算はあんまりありません。従って学生諸君等の交通費はお渡しできません、その代わりに、その代わりにってほどでもないけども、寝る所と食べ物がありますと。そういうことですね。これだけは絶対に忘れないで言ってくれということで、私はそれを頭の中で繰り返しながら研究室に入っていました。それまで私はその考古の部屋へ入ったことが無いんです。予科ですからね、まだ何をやるか決めなくていい時期、専門にまだ行く前ですから。実は國學院へ入ったのは一つ大きな理由がありまして。私、あの王朝文学というものとそれから軍記物、平家物語とかああいうもの。ああいうものを中学時代の教科書で読みましてね、好きになった。で、そんなことをやってみようかなと。すると、國學院ってのは面白そうだと。それからもう一つは、数学嫌いなんです。試験に数学が無かった。これはいいぞということで、受けたら無事に入ったということなんですね。

#### 大学研究室の予算事情

まあそれでとにかく(研究室に)入って、そのことを樋口先生に申し上げましたら、樋口先生ね、お金が無くて調査できるかなって、しかししょうがないなって。しょうがないなつてのは、恐らく野田へ来て講演したことが頭の中にすぐ浮かんだんでしょう。で、頼まれたんじゃないしょうがないなということなんだろう。

私はね、その時は、田中先生がおっしゃるのは、変なことをおっしゃるなと思いつつ、ずっと来てたんですね。実は、後で気が付いたんですけど、田中先生は、台北帝国大学の出身で、帝国大学でしかも助手をやっているんです、卒業してね。それで現地召集を受けて軍隊へ入るんです。そういうことで、研究室の予算は、田中先生はご存じなんですね。国立、帝国大学ですから研究室の予算はかなり持ってたはずですよ。しかも外地でしょう。京城もそうでしたけどね。台北ですから国内、内地とは違います。ですから予算的にも政府としてはかなり潤沢に研究室予算は与えておったんだと思います。それを使ってみんな研究活動をやるわけです。田中先生の頭の中にはね、國學院の研究室にも研究室予算があるだろう、ということが、頭の中にあつたんだろうと思います。だから、学生諸君の交通費だけは研究室で出してちょうだいと。それをまともに言わずに、お金が無いと言えばそれでわかるだろうと、こう考えられたのかなと、後になって思いましたね。

実は私立の大学では、研究室予算はもう本当に少ないです。あつても、研究室の予算は本当微々たるものです。で、それから個人にね、一人一人に図書予算が付きます。私は25万貰ってたかな。図書費ですね。研究のための図書費ということで、貰ってましたけどね。学会出張なんかは、費用は勿論出ますから、それはまあいいんですけど、大学によっては、学会出張は1回しか行けないとかそういうこともあります。学会はだいたい春・秋に2回あります。それからもう一つは、一人で学会に7つ8つ、あるいは多い人は10ぐらい入ります。ですからそれぞれの学会へ行こうとしますとみんなギリギリなんですね。とにかく、そういう予算が

大学に恐らくあるだろうと考えて、田中先生はおっしゃったんだろうと今は思ってます。

#### 調査した資料は現地で保管を

いずれにしても、いよいよ調査ということになるんですが、実はこの調査がね、博物館を作るための一つの布石になっているんです。樋口先生もおっしゃっていましたが、全国で調査はあるけれども、だいたい調査して発掘された資料が現地に残ってるってのは割と少ないんですよ。皆大学に持ってきちゃうとかね、あるいはよそへ、国立博物館へ持って行っちゃう。そういう形でね現地に意外と残らないんですよ。ですから、調査したらば現地にできるだけ置くのが、当たり前の話。だけど、現地でそれを保管する、保存・管理する施設が無いとどうしようもないということですね。これは、よそに持っていかがるを得ない。そういうことになるんですけども。ですから、保存・管理する施設を、やはり現地としても考えなきゃいかんということ、野田へ来てもおっしゃってありました。

樋口先生ご自身は、昭和2年に清水貝塚を学生時代掘ってるんですよ。発掘やってますし。で、それは勿論掘ったものは持って帰りますね。それは別に故意にじゃなくて、大山史前学研究所という、これは日露戦争で有名な大山巖元帥。その方のお子さんが、やはり軍人になりまして、ドイツに留学しました。ドイツに留学するんですけど、そこで勉強したのが考古学。大山柏さん。大山さんは日本に帰って来て大山史前学研究所を開きます。そこへ樋口先生が出入りしてたんですね。

大山史前学研究所は、東葛地方の関宿からずーと市川へかけての貝塚、江戸川縁の貝塚、これを発掘して土器の形態・文様差から、年代を決めていこうということで発掘をします。その中の一環として、清水貝塚を掘ります。それから山崎貝塚も発掘します。その清水貝塚に樋口先生もおいでになって。野田へですね、好感を持っていたようであります。

#### 初石古墳の発掘

初め文協は、文協主催ということと言われた

ようですけども、やはり野田高校が主催した方がよろしかろうということで、野田高等女学校が主催しまして、発掘調査に入ります。

初石古墳群と言っておりました、直径16m、高さが1.5m、小さなもんです。これを掘りまして、円筒埴輪が出てまいります。円筒埴輪は(古墳を)ぐるっと回るんですけども、ここの墳の場合には、半分東側だけ出てきましたね。大体半分しか回ってないんです。ぐるり全部回らない。要するに、回してあるところは前の方ですね。それで、後ろの方は、埴輪を回してない。真ん中も掘ったんですけどね、真ん中は全く何も見つからない。で、結局埴輪は円筒埴輪だけの発見ということになるんです。

その頃ちょうど登呂も掘ってますし、それから木更津で菅生遺跡という有名な遺跡があります。これは國學院で大場磐雄先生、私の先生なんです。大場先生が調査中。樋口先生は野田の方で掘ってるということで、向こうの新聞に出たり、野田の方も報道されたりなんかして、非常に発掘ブームがこの辺に出るんですね。

樋口先生は出来るだけ(出土したものは)現地に残しておくということを言われたし、私もそれですと今日まで貫いてきております。私は約40年間浜松で調査をやっております。発掘した鏡など、全部現地に置いております。そのために調査するのにいちいち向こうへ行かなきゃいけませんけれど、不便なことですけど、当たり前のことでもあります。

そこで、その初石古墳から出土したものはですね、保管するところがないんですね。で、結局興風会の図書館<sup>(6)</sup>、これは佐藤(眞)先生<sup>(7)</sup>がいらした図書館ですね。文協の事務局が佐藤先生というか興風会図書館にありまして。佐藤先生がそれを主宰していくという形になります。それで、興風会図書館で保管するということになります。

#### 文協による東深井古墳の発掘

小円墳を調査しております時に、新川中学校の教頭でいらした山田和夫先生、その方がお見えになりまして、こういうものならうちの方にいくらでもあるよと、東深井に。山田先生

は運河駅のすぐ反対側のお宅ですから、運河駅の出口の反対側、今は両方ともありますけども、(古くからあった現在の西口の)その反対側のお宅なんですね。

東深井に行きますと、たくさんあるとおっしゃる。私はそれ知らなかったものですから、じゃあぜひ後で見せてくださいということで、5月か6月ごろ(初石古墳の)調査が終わった後で、山田先生を訪ねまして、現場へ入ります。東深井の台地の上に累々とあるわけです。先ほど言いましたように松根油、松の木の根っこを取った痕跡がいっぱいありました。石棺を包んである粘土などは散らかって、それはもう大変だと。

で、聞くところによると、当時食糧事情が非常に悪いですから、開墾したいと言ってるというので。出来るだけ早く調査しなきゃいかんということで帰ってきましたね、佐藤先生にお話ししました。そこで現地と一緒にいったんだと思います。やはり調査は急がなきゃいかんということで、また文協の方で調査ということになります。その時にはもう文協は成立しております。文協の会議にかけてね、調査に入る。

あとになって田中先生に最初の調査、初石の時に一体お金はどうしたんですかと聞いたら、私は知らないと言われました。ですから田中先生以外の方がお金のことをやってたんでしょうね。

学生諸君は野田高に泊るわけですね。炊事は野田高の生徒さんがやってくれる。で、お風呂はどうしたかといいますとね、七工場<sup>(8)</sup>、今のもの知りしょうゆ館があるあそこへ行きましてね、職員さんたちが入る大きな風呂があるんですね。学生は皆びっくりしてましたよ。蒸気で沸くのでびっくりしてましたね。わーと蒸気で沸くんですね。そういう大きなお風呂へ入って、それでまた野田高へ帰ってくるということですね。それで夜はミーティングがありました。私もね、実は話が前後しますけど、初石古墳の(調査と樋口先生の)橋渡しをやっただけでね、その頃はまだ考古学をやるとは思っていない。けども、何となく、家から野田高まで歩いて10分もかからないんです。ですから、夜

顔見せないとちょっと具合悪いからと顔を出す。すると明日も来いよって話になるんですね。で、明日現地に行きます。そうこうしているうちに毎日毎日、夜は野田高、昼は現場という風になりましたね、段々段々はまっていくんですね。

調査が終わりましてちょっと何かありますとすぐ研究室へ来いと話が来る。研究室にいると非常に便利ですから、そういうことで段々根城になっていくということになる。そういうことになりますと、先輩からあそこの遺跡に行くからちょっと一緒に来いと、そういう形でこちら引っぱり回されると。発掘あるから参加するとか、段々段々はまっていくという形になります。

#### 郷土博物館建設運動の始まり

それで、実は東深井の古墳の方もそうなんですけれども、これは大変だということで文協の方へ話をして、文協が中心になりまして、今度は野田高校は援助という形になり、それで(発掘調査を)やられたわけですね。

その時には田中先生は忍岡かどこか<sup>(9)</sup>、東京の方へ、都立の方へ(勤務先が)変わられておりますけれども、次の先生がやってくれて、野田高校と一緒に國學院の考古学会の学生諸君も来まして、それで一緒に調査をして大きな成果を挙げるということになるわけでありませう。

その時にもやはり出土した鉄の矢じりであるとか玉であるとかは、全部図書館で保管するという形で。保管場所はそこしかない。で、興風会図書館に置いてもらって、夜になると懇親を兼ねた発表会といいますかね。それもやはり興風会図書館で開催するということになります。興風会図書館が博物館を作るための一つの根城と言うか根拠地みたいな感じになってくるわけですね。文協の中にも池松(武之亮)さん<sup>(10)</sup>とか市山盛雄さん<sup>(11)</sup>そういう方たちが中心になりまして、博物館を作ろうじゃないかという動きになって参ります。

で、昭和24年、東深井で調査をしたあと、10月の野田町文化祭に合わせて「東葛地方の古

代文化展」、これを開催しました。実は博物館を作ろうじゃないかという動きは、文協の中から出てきていたんですね。

教育委員会としては、その頃まだ博物館を作ろうということはあまり考えてなかったと思います。文協の中から、こういう立派なものがあるのに、これを地元置くためにはどうしても博物館を作らなきゃいかん。野田には立派な図書館がある、これは興風会のことですけども。図書館はあるんだから、博物館も市立でどうしても作ろうじゃないかということで博物館の建設を要望します。それで8月野田市にそれを陳情する。これを文協がやったんです。これもやはり市民運動ですね。非常にそういう意味では珍しい。9月に、文協内に郷土博物館建設促進特別委員会を設け、資料の収集を始めるというようなことがありました。

#### 中根八幡前遺跡の発見

そんなことをやっていますうちに、実は26年、中根八幡前、弥生式住居址とよく言っていますが、その中根八幡前で遺跡が見つかります。

これは石毛直道君<sup>(12)</sup>、今は京都におりまして民族学者として世界的に有名なんですけども。京大を出ました。石毛君のお父さんは野田市の教育長をやっておられました。私の元へ来て、中学時代からずっと一緒に歩いていたんです。直道君が考古をやりたい、大学はどこがいいかと(聞いた)。私は絶対京都へ行けと聞いた。直道君の性格を考えるとね、京都がいいと。お父さんは東大行かせたかった。けど、直道君の性格は京都がいいということで京都へ行けと言って京都へ行かせた。私は一浪して入ったと思っていたが、二浪したと彼は言っていましたね。とにかく二浪して京都へ入りました。

京都へ入って考古学やりだしたんですけど、だんだんだんだん考古学から民族学、といってもフォークロア、現代の民俗社会でなく、いわゆる未開社会、そういうところへ行ってみて探検研究する、そういう方面に惹かれた。それで一番最初はトンガ王国、それが一番最初であった。その中で考古学から民族学へと、だんだんだん

だん傾いていくわけです。

それは別として、その直道君が、二中(野田市立第二中学校)の中学時代に中根八幡前で私と一緒に調査をした。調査というよりも見つけた。直道君が私の家に来たのは、中根八幡前遺跡があるあの場所から田んぼを超えて向こう側、南の方に土器が散ってる所がありますよというんで、それじゃ行こうということで。二中前からあの場所まで来たところ、吉岡初太郎さんのお宅の畑だったんですけども、その畑がね、何かの作物を採った後で大分土が散らばってたんですね。平らじゃなくて大分盛り上がったたり、土があっちこっち散ってるからちょっと入ってみようと思ってみたら土器片があつて、その土器片が縄文ではない、こんなの珍しい。その頃まだ、あまり弥生とか古墳時代の土器が野田地方では見つかってなかったものですから、これは珍しいということで早速、吉岡さんの所でシャベルを借りまして、スーと、掘ってみた。深く掘るんじゃなくて、浅く攫ってみたんですね。そしたらね、線が出てきたんです。赤土と黒土の境がずーと線状に。これは住居跡出るぞということで止めまして。早速、吉岡さんに話して、発掘してもよろしいかと尋ねたところ、3月から4月半ばまでならばいいという話になったので、それを持ち帰って教育委員会へ話をしました。教育委員会でその時にね、予算がある程度使えるものが、少しあったんですね。それを使おうかということで調査ができたんです。

ここ(レジュメ)に公費支出と書いてありますけれども、公費を使った調査では野田で初めてです。けどどこに書きますとね、全部公費だと思いかもしれませんが、実はお金は微々たるものでしてね、フィルムを買ったり消耗品を買ったり、そのくらいしかないので。学生が5~6人来ましてね、私の家に泊まってそれで現場へ行っただけなんです。ですから、公費は出したんですけども、私費も交じっておるというようなことになるんです。しかし公費を出した初めての調査です。珍しいです。

当時としては大体そんな話を持ち込みますとね、お前らの道楽でやるのに公のお金を出す必

要はないというのが普通なんです。あちらこちらで私もずいぶんそれを言われました。以前はそんなものです。考古学で発掘したいと言いますと道楽だと言われましたね。野田の場合にはなかった。このようになりまして、住居跡から土器も発見されました。それを保管するのも興風会図書館です。ひいては文協がそれを後押しするということになるわけです。

#### 食生活展の開催

そうこうしているうちに、文協協力によります食生活展<sup>(13)</sup>が樋口先生を中心として行われます。これは興風会館で展示をしました。素晴らしい展示でして、私は学生なんですけれども手伝いました。これは教育委員会が樋口先生のお宅、國學院の考古学資料室、あるいは相模女子大学(生活史研究室)などから資料を借りてきました。樋口先生は相模女子大学にも行ってましたから、資料を相模女子大に持って行ってあったんです。同時に中央婦人会あるいはキッコーマンとか保健所とか、その他いろいろな方面に協力をお願いしました。これ単なる協力じゃなくてね、食生活について調査をしてもらったんです。衛生状態はどうだとか展示していく。これは当時の画期的な展示のやり方だと思います。これを私も学生でしたけれど、樋口先生に言われて一緒になってやりました。

この時の写真が、図録の中にも出ておるんですけどね。これは後でご覧になってください。この図録の中に、展示品の写真も出てます。そこに文字が書いてあります。説明ですね。その文字全部樋口先生が書いたんです。朝、現場、興風会館へ行きましてね、それで腕まくりをして、書いていく。資料一点一点全部ですね、この説明と資料の名前も全部樋口先生がお書きになりました。樋口先生達筆ですからね、立派な文字で書いてありますね。これはもう非常に、当時としては珍しい展示会で、よそからもたくさんの方がおいでになりました。その前に住居の展覧会をやっておるんですけど、やっておるんですけど記録を残してなかった。で、食生活の時にはこれは反省しまして、記録を残そうということで。佐藤先生が中心となりまし

て、パンフレット作りました。食生活展の記録がね、(この特別展会場にも)展示してあるのかな、そういう記録を作りました。

#### 萬葉歌碑の建設

それからもう一つは、これは市山盛雄さん。市山さんは後でお名前が出てきますが歌人なんです。歌詠み。歌詠みで「真人」という歌の雑誌を主宰しておられました。非常に造詣が深い。それから歴史の造詣もかなり深い。キッコーマンでは人事部長やられ、キッコーマンの社史も編さんされました。山口県の方です。しかも交友関係が非常に広いんですね。そういうお方です。

で、私が中根八幡で掘りました土器は、当時としては弥生時代の一番新しい時代の土器だと私は思いました。前野町式という形式なんですけど、弥生時代の最終のもう古墳時代に入る、そういうような時代の住居であるということと発表しました。それで、あそこを弥生式住居と付けたんです。

今は土器の研究がどんどん進みまして、あれが古墳時代の初めに入ることが分かってきました。今は古墳時代の初期、4世紀としております。とにかく弥生時代と発表しましたので、市山さんはこれは米を作る時代。米を作るということで葛飾早稲の歌が万葉集にあると。私はその時は知らなかったんです。万葉集の色々な歌の中に「鳩鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも」という歌があるということ。鳩鳥は枕詞ですから、神聖な神様にお供える食べ物を作った。恋しい人は外に居て扉をとんとんと叩いているけども、外に立たせておくことができましようか、立たせておけません、と。迎え入れたということですね。

その歌なんですけども、その歌を引き合いに出されまして、歌碑を作ろうと。歌碑の建設を、市山盛雄さんを中心に、文協が中心となって募金活動その他を始めました。それで立派な歌碑が建つんです。歌碑の文字は尾上柴舟さん<sup>(14)</sup>、歌人でもあります書家でもあります。その方の筆で書いてもらって、あそこへ碑が立ちます。その碑を建てるお金は全部寄付で賄ってます。

ついでにあの土地も買ってしまおうということで、あの土地を吉岡初太郎さんから買って。その歌碑を立てる委員会がですよ。で、土地を買って野田市に寄付をする。そういうことであそこに弥生公園というのが出来上がるわけです。

### 具体化する博物館建設

とにかくそういうような運動があつて、これも博物館を作れば弥生公園なども博物館の施設の一環となるということで、文協を中心とした後援会活動はですね、非常に素晴らしい働きをしてくれたわけです。

そういうようなことでありまして、漸く29年、郷土博物館建設が野田市議会で議決される。で、設立準備委員会というのができます。勿論この中には佐藤先生も入ります。設立準備委員会というのは市議会議員と、学識経験者とかいろいろな人がお入りになりますが、この段階でも実は設立準備委員会の事務局と資料の保管場所を、興風会図書館内に置かせてもらうよう教育委員会から財団法人興風会に依頼ということで、結果的には図書館の中に置かせてもらうということで、図書館の2階の一室をですね、博物館設立のための資料保管室として使っていました。この頃は樋口先生の寄贈もありましたし資料はどんどんどんどん集まっていました。準備室の看板も興風会図書館の看板と並べてかけてありました。

昭和30年、博物館資料展示会を興風会館で行いました。たくさんの資料を興風会館で展示しました。これは博物館建設のための一つのアピールにもなるわけです。

### 野田醤油株式会社からの建設資金と茂木佐平治邸の寄付

そこへ昭和31年、それに更に推進する動きを早めたのは野田醤油株式会社<sup>(15)</sup>から創立40周年記念として、博物館建設資金1千万円と茂木佐平治邸、現在の市民会館ですね、これを野田市に寄贈するという事になったわけがあります。市山さんが言っておられたけども、市山さんは醸造博物館を作れ作れと盛んに言っ

ておられたんですね。博物館を作れ作れと言っているなら、野田市が作る、そこへ乗ったらどうだということで、市山君1千万円付けてやろうということをおられたそうです。市山さん喜んでましたね。

しかしこれ、後でまた別の話ですが、当時の市長さん戸邊織太郎さんでしょう。戸邊市長には期待はずれだったというのがキッコーマンの一部の中から出たようです。キッコーマンで1千万円出せば、野田市もね、少なくとも500万位は乗せるだろうと。うまくいけばまあ1千万乗せるかもしれない。そうすると2千万あれば当時の博物館としては、まあいいものが出来たんじゃないかなということをおられましたね。そんなこと市山さんも言われてましたね。だから戸邊市長に一杯食わされたよ。

しかしそれは別として、当時その1千万を頂いて、それを基金として。池松武之亮さん、いびき先生ですね。池松先生から5万円頂いたんですよ。博物館の基金として。それからね、文部省からね25万補助金をもらいました。

時間が無くなってきましたから簡単に申し上げますと、私が博物館の学芸員としてここに来たときには博物館の職員は私を入れて3人です。学芸員、事務員、用務員の3人。館長は教育長兼務ですからここにはおりません。3人で全部です。

そこへ後で昭和41年か、文化財保護条例を我々ここで作りました。そしたらば、条例を作ったんだから文化財も全部お前の所でやれと、博物館が担当することになるのです。ですから、私がおりました間は文化財保護業務をやりましたね。私が退職して今の社会教育の方へ移ったんですね。そういうようなことで私は発掘やったり整理をしたり、さらに博物館の仕事もありますので忙しかったけれど楽しい仕事でした。

私が学芸員に入ってから社会教育課長、吉澤さんという方ですが、ちょっと一緒に来いというから文部省へ行きました。これは補助金を貰ったお礼だって言うんですね。そんなこともやるのかなと思いつながら行ったんですけども。そしたらね、社会教育課長、文部省の、えらい

威張ってましたね。その頃文部省は補助金は県立館だけと決めていたそうです。県立館を作るときには補助金を渡すけれども、市立までは手が回らない。それを、特別に、野田市だから分けてやったんだと。ただそれだけのことで威張ってました。えらい威張ってる奴だなと思っながら私も聞いていたんですが。

#### 建設された博物館への想い

しかし、それは別として1千万円というのはやはり、作るために非常に大きな力になったのはまぎれもないことであります。で、戸邊市長は出来上がってからもちよいちよいおいでになりまして、この場所にこれ作ってよかったと。いくつもつくる候補地はあったのですけれども。結局、市民会館、茂木佐邸が寄付されたので、ここに入れるのが一番安全だと。塀もちゃんとあるし、門もあるし、市民会館を保全するための人の住み込みが居るし、非常に安全だということでここにしたい、ということをおっしゃってました。

ただ、ここは場所が狭いから、これ以上広げることがなかなか無理ですね。そういう点ではちょっとまあ不便なところですけども。だから博物館の必要条件である収蔵庫、立派な収蔵庫。そういうのは作れません。現在の蔵(今の収蔵庫)を壊せば、そこに収蔵庫作れば作れるんですよ。とにかく立派な収蔵庫がないというのは困る。博物館が(資料を)整理するための部屋はやっぱり必要です。それから写真撮影をする部屋も当然必要になります。それから学芸員が研究する場所、これも必要になります。そういうものはね、まだまだできてない。ただ市民会館が一緒になりましたので、最近は向こうで仕事ができますから、そういう意味では割合と良くなったといえると思います。

それはまた別として、とにかく博物館ができて、これが千葉県の登録博物館、これは博物館法がありまして、博物館法で登録された千葉県の第一号なんです。これ以降県内で段々堅実なものを作るようになっていきました。まあそういう意味では非常に意義のある博物館ですね。

野田市は一号というのが割とあります。文化

財も千葉県の文化財指定第一号が清水貝塚ですから。ただ第一号になってその後はどんどん(施設を)拡張してゆけばいいんですけども、なかなかその辺ができていくということになるわけですね。

#### 建設運動に尽力された池松武之亮先生

最後に佐藤さんなど(建設運動に尽力された主な方々をレジュメに)書いておいたのですが、(佐藤さんは)お話の中で出しましたけど。池松武之亮さん。お医者さん、いびき博士。この方非常に有名で皆さんご存知の方多いと思いますが、池松先生はやはり博物館を作る上で積極的に動いていただきましたね。町会議員を昔やられたこともある。

それから池松先生は先進的なんですね。すぐに新しいことを思いつく。ですから、博物館はどうあるべきか、もっと博物館を大きくしなきゃいかんということもそうです。それから当然、医学の方は大きな病院、設備の整った病院を作ってそれで個人の開業医はその一つの衛星みたいなサテライトみたいになります。自分で診察して何かあれば大病院へ送り込む、開業をした医者が、自分が送り込んだ患者はその病院まで行って診察する、診る。そういうことをやらなきゃいかんということを盛んに言われてました。これは私は非常に良いご意見だと思っておるんです。それからまたお医者さん自身の研修にもなりますし。

皆さんご存じの方いるかもしれませんが、巡回診療を池松先生はやられた。野田から関宿地区。曜日を決めまして、ステーションを決めて、そこへね、ジープを改造した車で巡回診療に入ります。何月何曜日何時にここに行きますよと。どこどこって場所決まっていますから。で、そこへ行って診療することをやられましてね、地元の人に大変喜ばれた。

で、私はその巡回診療で助かったのは、関宿の方に調査へ行くのにね、自転車ですから昔はね、これ大変なんです。でね、巡回診療を利用して、乗せてもらおうです。その診療車で自分の行きたいところに近いところで下ろしてもらって。で、時間までにその診療している場

所へ行っておれば、また乗せて帰ってきてもらえますからね。それをね、ちょいちょい利用しました。巡回診療を池松先生がやられて、(博物館開館後は)博物館協議会の委員にもなっていたし、佐藤先生もそうです。市山さんもそうです。協議会の中でいろいろなご意見を出していただいて、博物館運営には非常に役に立ったということでもあります。

## むすび

どうも時間があまりないので、色々申し上げたいことが沢山ありますけども、一応これで終わらせていただきます。後は、(博物館運営に必要な)人脈とかいろいろあります。何しろ人がいない。何かやろうとしますと人脈を使って資料を集めるしかない。で、結局電話一本でなんとかできる人脈がかなりあったものですから、特別展とかを開催していったということでもあります。じゃあ、これくらいで一応終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

## 註

- (1) 1919～2011。昭和21年に町立野田高等女学校に着任し、地理・日本史を教える傍ら「社会クラブ」を創設。生徒を連れて市内の遺跡等を探訪しており、こうした活動が女学校と樋口清之や野田地方文化団体協議会をつなぐきっかけとなった。醤油や利根運河に関する研究を行い、野田市史編さん委員会委員や同専門(編集)委員などを務めた。
- (2) 町立野田高等女学校は大正14年創立。昭和23年から県立野田高等学校となり、平成18年に千葉県立野田北高等学校と合併し、千葉県立野田中央高等学校となった。
- (3) 野田貝塚の別名。野田市の清水公園周辺に広がる馬蹄形の貝塚で、昭和11年に千葉県の史跡に指定された。
- (4) 1909～1997。考古学者・國學院大學名誉教授。國學院大學考古学資料室(現・國學院大學博物館)を創設、発展させた。当館の設立にあたっては、郷土博物館のあり方や資料の収集方針などに大きな影響を与えた。
- (5) 現・野田市文化団体協議会。昭和23年に野田の文化団体が横の繋がりを持ち、お互いに連絡を取り合うことで地域の文化向上を目指すことを目的に結成された。
- (6) 昭和4年から昭和50年まで野田の図書館は財団法人興風会によって運営されており、野田地方文化団体協議会や博物館設立準備委員会の事務所が置かれ、文化活動の拠点となっていた。その後、財団法人興風会図書館の運営を経て、昭和54年に野田市に寄付され、野田市立興風図書館となった。
- (7) 1907～1991。興風会図書館館長。野田地方文化団体協議会副会長・理事長、博物館設立準備委員会委員、博物館運営協議会委員などを務めた、戦後の野田の文化活動における中心人物の一人。令和元年度特別展「郷土史へのまなざし～博物館誕生のものがたり～」では、佐藤を軸に当館が開館を迎えるまでの歴史を紹介した。
- (8) 現・キッコーマンもの知りしょうゆ館(野田工場)。大正15年竣工。当時の最先端の機械と技術を導入した近代工場として、醸造業界の先駆者となった。竣工当初は第17工場であり、昭和17年から昭和62年までは第7工場と呼ばれていた。
- (9) 田中則雄の野田高等学校の次の勤務地は東京都立雪谷高等学校。東京都立忍岡高等学校は定年を迎えた学校。
- (10) 1912～1990。医師。いびき研究の先駆者で、「いびき博士」として知られる。野田市内で池松耳鼻咽喉科を開業する傍ら、野田町会議員や野田地方文化団体協議会会長(2、8代)を務め、野田市の文化活動の発展に尽力した。

- (11) 1897～1987。野田醤油株式会社社員。人事部長などを務めたほか、同社の社史編纂に携わる。博物館設立にあたっては野田醤油株式会社との橋渡し役にもなり、博物館設立準備委員会委員、博物館運営協議会会長、野田地方文化団体協議会会長（6代）などを歴任した。歌人としても多数の著作がある。
- (12) 1937～。文化人類学者・民族学者。国立民族学博物館名誉館長。中根八幡前遺跡のほか、昭和31年には香取原古墳群の第一号墳の発見にも関わった。
- (13) 昭和27年に野田市文化祭に合わせて興風会館で開催された。展覧会の記録として「食生活の変遷―食生活展覧会史料集成―」が昭和29年に刊行された。
- (14) 1876～1957。市山盛雄が師事した岡山県津山市出身の歌人・書家・国学者。
- (15) 現・キッコーマン株式会社。大正6年設立。

## オンライン検定システムの開発

野田もの知り検定企画実行委員会

委員長 大澤一秋

### はじめに

野田もの知り検定企画実行委員会では、令和2年5月に「野田もの知り検定オンライン」の運用を開始した。同検定は、同会として初めての検定開催でもある。

同検定は、Google社のクラウドサービス上にGoogle Apps Scriptというプログラミング言語を用いて開発した「オンライン検定システム」によって実現されたものである。

本稿は、同システムの開発を紹介すると共に、その応用を提案するものである。

### 1. 開発の経緯

#### (1)野田もの知り検定企画実行委員会について

「野田もの知り検定企画実行委員会」は、ご当地検定制度の創設とその実施・運用を目指して平成28年10月に結成された市民団体である。当会は、結成以来、野田市域の自然・地理・文化・歴史の4分野での検定問題案の作成を行いながら、年3回ほどのクイズ大会を市主催のイベント会場などで開催し検定の実施に向けて模索して来た。

#### (2)検定実施に向けた課題

検定の実施ともなれば、検定会場費、チラシやポスターさらに検定問題用紙や認定証の印刷費などがコストとして発生する。それを賄うためには一定の資金が必要になる。しかし、野田もの知り検定企画実行委員会は、有志の一般市民を構成員とした任意の市民活動団体であり、その資金基盤は脆弱である。

検定費を徴収することで、それらを賄うことも考えられるが、これまでのクイズ大会の実施を通じて得られた感触では、それは難しいと判断せざるを得ない状況であった。

そもそもご当地検定制度の創設は、野田市域

のまちづくりと魅力発信を目的にしており、気軽に誰でも参加できることを目指していたから有料化は安易に選択したくないとの意見が当会メンバーには多くあった。だからと言って、野田市に資金援助を求めることは、ボランティア精神にも反するものであるし、昨今の市財政状況を見れば出来ることではない。

#### (3)災い転じて

資金問題に解決策が見いだせないまま3年の年月が経過していた令和2年2月、世界的なコロナウイルス禍によって当会活動も一時縮小せざるを得なくなった。4月になると政府により緊急事態宣言も発令され、公共施設も休館となり当会活動は一時的に休止した。

また、全国でコロナウイルス感染予防策としてStayHomeが励行され、企業における勤務や会議、病院の診療、学校の授業などのオンライン化が社会要請としてあり進められる様になった。

コロナウイルス禍の状況下では、この様に「オンライン」が重要なキーワードとなっており、当会が実施を目指しているご当地検定においても真剣に検討する必要が感じられた。しかも、オンライン化できれば会場費も印刷費も不要であり、永年の課題を一気に解決することにもなる。

### 2. オンライン検定に求められる機能

ご当地検定をオンラインで実施する場合に求められる機能を整理すると、①色々な端末(スマートフォンやパソコン)での検定、②採点と称号判定、③電子認定証の生成、④電子認定証の送付の4点であり、さらにこれら一連の事務作業の自動化も併せて必要な機能ということになる。

### 3. 機能の実現方法

パソコン上で動作させた Microsoft 社の WORD や EXCEL などを活用した事務作業の自動化は、作業手順をマクロ<sup>(1)</sup>という一種のプログラムを組むことで実現できる機能がそれらには組み込まれている。

しかし、ご当地検定をオンラインで実施するためには、インターネット上に前項で示した5点の機能を実現する必要があることからこれらの応用だけでは難しい。

一方、Google 社のクラウドサービスには、Microsoft 社のそれに対応する「ドキュメント<sup>(2)</sup>」や「スプレッドシート<sup>(3)</sup>」があり、インターネット上で提供されている(手元のパソコン上で動作するのではなく、Google 社のコンピュータ上で動作すると云うこと)。加えて「フォーム<sup>(4)</sup>」と云うアンケートやテストを実施できる機能も提供されている。しかも、マクロと同様の仕組みが可能な Google Apps Script<sup>(5)</sup>と云うプログラミング言語も提供されていることから事務手順をそれで記述すれば、自動化が可能である。

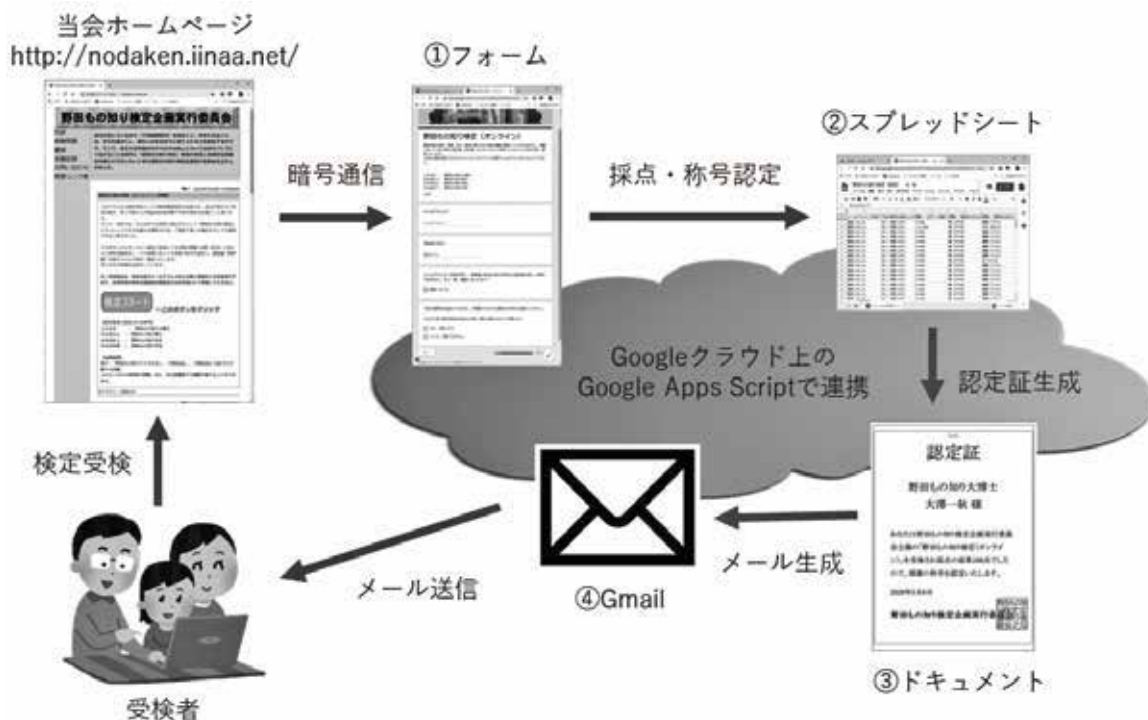
### 4. オンライン検定の仕組み

ご当地検定の自動化は、Google 社のクラウドサービスで提供されている、①アンケート機能である「フォーム」、②表集計機能である「スプレッドシート」、③文書作成機能である「ドキュメント」、④電子メール送信機能である「Gmail」の4つを Google クラウド上で動作する Google Apps Script で記述したプログラムによって連携させることで実現できる【図1】。

#### (1) 検定機能

「フォーム」は、元来はアンケート機能であるがテストを実施する機能も備えており、一般的な Web ブラウザでアクセスできることから、パソコン(Windows や Mac)、スマートフォン(Android や iPhone)、タブレット端末(Android や iPad)などあらゆるネット端末機器からの受検環境を提供できる。

「フォーム」で作成された検定画面は、①個人情報(受検者氏名、電子メールアドレス)入力と個人情報使用の承諾の画面【写真1】、②検定問題出題画面【写真2】の2種から構成される。



【図1】 オンライン検定システムの構成



【写真1】



【写真2】

検定問題出題画面で全ての4者択一問題に答え、送信ボタンをクリックするとGoogleクラウド上の「スプレッドシート」により、入力された個人情報や回答が記録される。

なお、インターネットを介した通信は、SSL<sup>(6)</sup>で暗号化が行われており、盗聴や改ざんの危険はない。

## (2) 採点／称号判定機能

「フォーム」によってデータが送信されたこと(回答などが送信されたこと)がきっかけとなり、Google Apps Script で記述されたプログラム(後述する)が実行され、称号の判定がされる。なお、採点は、「フォーム」の機能によって行われている。

## (3) 電子認定証生成機能

「ドキュメント」によってあらかじめ作成しておいた電子認定証のひな形【写真3】を同プログ



【写真3】



【写真4】

ラムが読み出し、シリアル番号、受検者氏名、称号、点数(採点結果)、年月日をセットしてPDF<sup>(7)</sup>に変換した電子認定証を生成する【写真4】。

## (4) 電子認定証送付機能

受検者氏名、受検者電子メールアドレス、電子認定証などが同プログラムによってセットされ「Gmail」によって送信される。

## 5. プログラム

Google クラウドの各機能を連携させるプログラムは Google Apps Script で記述されている。

以下に全コードを公開するが、非常に簡単なプログラムであることが分かる。

```
// 自動検定プログラム ©2020 Kazuaki Ohsawa
function myFunction(e) {
// 受検データ読み込み
var sheet = SpreadsheetApp.getActiveSheet();
var row = e.range.getRow();
var mailAdd = sheet.getRange(
row,2).getValue();
var score = sheet.getRange(row,3).getValue();
var name = sheet.getRange(row,4).getValue();
var num = row - 1;
var d = new Date();
var year = d.getFullYear();
var month = d.getMonth() + 1;
var date = d.getDate();
var fileName = '認定証' + '(' + name + '様');
// 称号判定
if ( score >= 100) {
var title = '野田もの知り大博士';
} else if ( score >= 80 ) {
var title = '野田もの知り博士';
} else if ( score >= 60 ) {
var title = '野田もの知り先生';
} else if ( score < 60 ) {
var title = '野田もの知り学生';
}
// 認定証ひな形をコピー
var sourceDocument = DriveApp.getFileById(
'██████████');
var copyDir = DriveApp.getFolderById(
'██████████');
var duplicateDocument =
sourceDocument.makeCopy(fileName,
copyDir);
var duplicateDocumentId =
duplicateDocument.getId();
// コピーした認定証ひな形の URL を生成
```

```
var createUrl =
'https://docs.google.com/document/d/' +
duplicateDocumentId + '/edit';
// 認定証を生成
var certification = DocumentApp.openByUrl(
createUrl)
var body = certification.getBody();
body.replaceText('{num}','G' + num);
body.replaceText('{title}',title);
body.replaceText('{score}',score);
body.replaceText('{name}',name);
body.replaceText('{y}',year);
body.replaceText('{m}',month);
body.replaceText('{d}',date);
certification.saveAndClose();
// 生成した認定証を取得
var certification = DocumentApp.openByUrl(
createUrl);
//PDF 変換
var pdf = certification.getBlob();
// 作成した PDF 認定証をメールに添付して送
る
var subject = '野田もの知り検定(オンライン)
の結果通知';
var senderName = '野田もの知り検定企画実
行委員会';
var body = name + '様 ¥n¥n 野田もの知り検
定(オンライン)の受検ありがとうございました。¥n
認定証を添付します。¥n¥n 野田もの知
り検定企画実行委員会 ¥n 委員長 大澤一秋';
MailApp.sendEmail({to: mailAdd, subject:
subject, name: senderName,
body: body, attachments: pdf });
// 認定証削除
var removeDocument =
DriveApp.getFileById(
duplicateDocumentId);
copyDir.removeFile(removeDocument);
}
```

注1：プログラムコード中、Google クラウド内の ID 番号などは██████で伏字としている。

注2：プログラムコード中の"¥"記号は本来バックスラッシュ。

## 6. 応用提案

当会は、本稿で紹介したオンライン検定システムによって「野田もの知り検定オンライン」の運用を開始した。これは、当会が平成 29 年度、30 年度、31 年度にそれぞれ発行した冊子「野田もの知りクイズ 50」、「同 Part2」、「同 Part3」【写真 5】を出題範囲として 50 問の検定問題を出題し、その成績に応じて「野田もの知り大博士」、「野田もの知り博士」、「野田もの知り先生」、「野田もの知り学生」の 4 ランクの称号を認定し電子認定証を電子メール送信するものである。

システムは、Google クラウド上で 24 時間 365 日稼働しているからネット環境さえあれば誰でもいつでも野田市域に関する「野田もの知り検定オンライン」の受験が可能である。

当会は、同検定によってまちづくりや野田市の魅力発信につながればとの思いで開発・運用している。同様のシステムは、Google のアカウントを入手すれば誰でも比較的簡単に構築・運用することが可能である。野田市には、鈴木貫太郎記念館、関根名人記念館、野田市郷土博物館・市民会館・こうのとりの里など特徴的な文化施設が存在する。同システムを応用すれば各施設に特化した検定の実施と認定証の送付が簡単に実現可能である。これの応用によって野田市自らが検定という「あそび」を主催し、魅力発信をしていくことを本稿の最後に提案とした。



【写真 5】

註

- (1) 簡易プログラム機能
- (2) 文書作成機能
- (3) 表計算機能
- (4) アンケート収集・集計機能
- (5) 簡易的なプログラミング言語の一種。携帯電話などの開発に使用されているプログラミング言語 Java がベースとなっている。
- (6) Secure Sockets Layer の略：インターネット上でデータを暗号化して送受信する手順。
- (7) Portable Document Format の略：電子文書の配布・交換・蓄積を行うために用いられる標準的な形式。

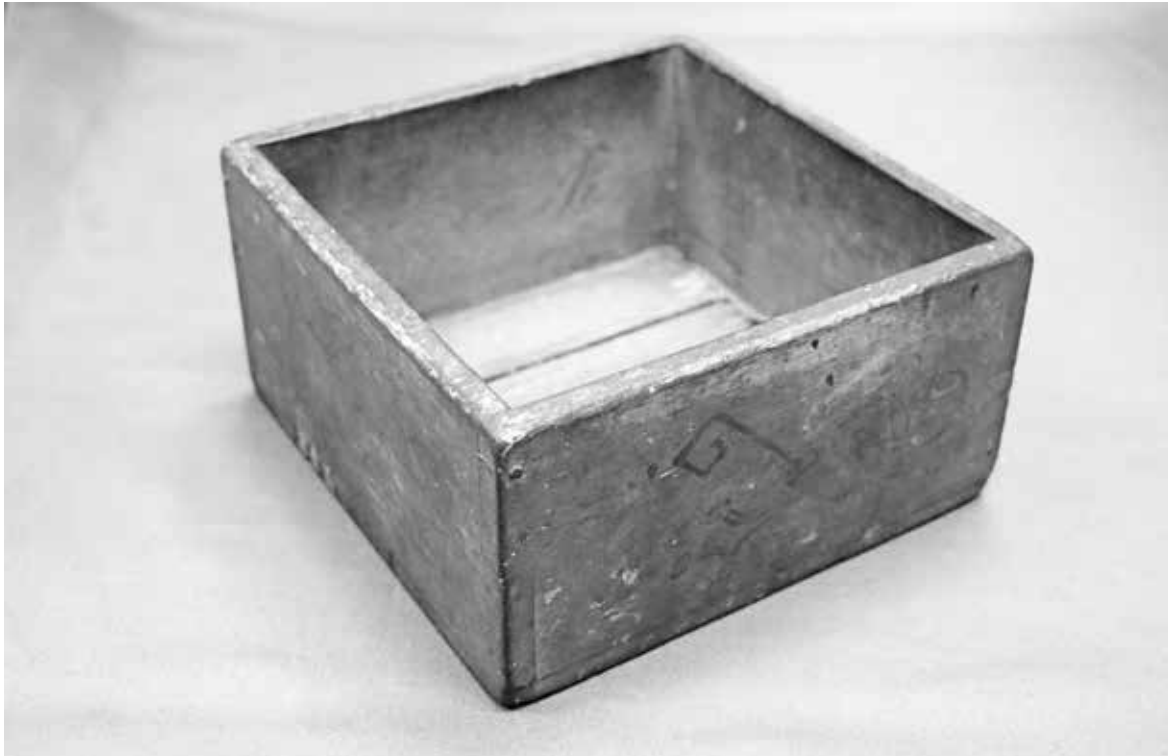


写真1

枡 (茂木家上棟式記念)。内寸が幅 150mm× 奥行 150mm× 高さ 80mm の一升枡。側面には打ち出の小槌や宝鑰などが描かれている。



写真2

枡 (茂木家上棟式記念) 底面。「大正十一年一月五日茂木家上棟式」の部分は別の筆で上書きされている。もとの筆が一部に見られ、後年になぞったものと思われる。

《表》野田・流山居住者から中田龍堂に差し出された葉書一覧

資料番号	日付	内容	差出人→宛先	備考
9129-B-4	昭和10年11月1日	(年賀状)	高梨兵左衛門→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野元湯神泉亭前」
9129-B-19	昭和9年12月5日	(御歳暮贈与二付御礼状)	茂木佐平治→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣東葛飾郡野田町野田」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野」
9129-B-3	昭和10年4月23日	(新築時期二付伺)	茂木房五郎→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野、神泉亭前」
9129-B-1	昭和10年1月1日	(年賀状)	茂木和三郎→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野元湯神泉亭前」
9129-B-62	昭和10年1月4日	(御占二付御礼状)	堀切あさ→中田龍堂様	差出人住所「流山町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野」
9129-B-2	昭和10年1月1日	(年賀状)	高梨政之助→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「東京市淀橋区下落合二丁目」
9129-B-6	昭和10年1月1日	(年賀状)	堀切敏次郎→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣流山町」 宛先住所「福島縣綴町在高野、温泉」
9129-B-9	昭和10年1月1日	(年賀状)	柘田定吉→中田龍堂殿	差出人住所「千葉縣東葛飾郡野田町上花輪」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野」
9129-B-8	昭和10年1月2日	(年賀状)	戸邊五右衛門→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野」
9129-B-7	昭和8年8月7日	(暑中見舞)	戸邊織太郎→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町中野台」 宛先住所「東京市淀橋区下落合二丁目」
9129-B-16	昭和8年8月3日	(暑中見舞)	アカシヤ園 柳常八、野田出張所 野田いちご園 →中田龍堂殿	差出人住所「千葉縣東葛飾郡野田町、千葉縣野田町清水公園驛前」 宛先住所「府下落合町下落合」
9129-B-17	昭和8年12月6日	(訪問日二付伺)	新井小三郎→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣東葛飾郡野田町」 宛先住所「東京市淀橋区下落合二丁目」
9129-B-14	昭和8年10月28日	(訪問日二付伺)	新井次郎→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町新井小三郎方」 宛先住所「東京市落合町下落合」
9129-B-12	昭和10年1月1日	(年賀状)	鈴木又七→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野元湯、高萩コウ様方」
9129-B-45	昭和9年8月21日	(近況通知)	高梨忠八郎→中田龍堂様	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野入の湯」
9129-B-13	昭和10年1月2日	(年賀状)	内田弥助→中田龍堂先生	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野」
9129-B-15	昭和10年1月3日	(年賀状)	藤崎定助→中田龍堂先生	差出人住所「千葉縣野田町」 宛先住所「福島縣石城郡箕輪村高野」

※表中の差出人名の字体については、資料に使われている字体をそのまま用いており、本文中の表記と一部異なっていることをお断りしておく。  
また、本表に掲げた資料の並びは、本文中で取り上げた順番に揃えている。

てた葉書がみられる(資料番号八二八四―一九、新井敏之氏寄託)。

(28) 佐藤真編『野田市文化財報告第六冊 野田の醤油経営資料集』野田市郷土博物館、一九八五年、一八三頁。

(29) 高梨忠八郎については、櫻井良樹『戦前期千葉県・神奈川県における県議会議員選挙の結果について』、『麗沢大学論叢』一〇号、一九九九年二月を参照。

### 《凡例》

一、表や史料中の人名は原文に倣った。

一、本文中の史料引用にあたっては、次のような表記を用いた。

① 字体は原則として常用漢字を用いた。

② 変体仮名は現用字体に改めた。

③ 句読点は筆者が適宜補った。

④ 文字が抹消されている場合は、左側にミを付け、訂正された文字を右傍に記した。また、抹消した文が判読不能の場合は■で記した。

⑤ 誤字・誤用と思われるものであっても原史料通り表記し(ママ)と記した。

⑥ 加筆部分は「」で示し、右傍に(加筆)と記した。

⑦ 頭注は「\*」でその位置を示し、記載内容をその後ろの適当な場所に(頭注\*)と挿入した。

一、プライバシーに関わる地番は伏せている。

一、史料の中には、差別的な表現を歴史用語としてそのまま使用した部分がある。これはもとより差別を容認するものではなく、差別の解消に資するためである。

註

- (1) 宮内貴久『家相の民俗学』吉川弘文館、二〇〇六年、三頁。
- (2) 村田あが『江戸時代の家相説』雄山閣、一九九九年、六一〜八〇頁。
- (3) 宮内貴久『明治期の家相見―渋谷常蔵の場合―』(同著『家相の民俗学』吉川弘文館、二〇〇六年、第四章)。
- (4) 『国指定名勝高梨氏庭園 昭和の改修記録 二八代主の美学』財団法人高梨本家上花輪歴史館、二〇〇四年。
- (5) 東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』学校法人東洋大学、一九九三年、一一頁。
- (6) 『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』七九頁。
- (7) 明治二二年八月「改正学科表」(『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』一五三頁)。西洋部は学年ごとに受講科目が変わり二〇科目があった。
- (8) 日文学・支那学・印度学については井上円了自身が明治二二年八月「哲学館将来ノ目的」のなかで次のように説明している。「日文学中ニハ史学・文学・宗教学・哲学ヲ兼修セシメ、支那学中ニハ文学・宗教学・哲学ヲ兼修セシメ、印度学中ニハ宗教学・哲学ヲ兼修セシメシナリ、而シテ其支那学モ印度学モ皆我邦ニ伝来スルモノニツイテ教授ヲ施セリ、故ニ是レ皆其名ハ他邦ノ学ナルモ其実我邦ノ学ナリ、唯我邦ノ学問中ニ日本在来ノモノト支那伝来ノモノト印度伝来ノモノ、別アルノミ、(詭点および中黒は本稿執筆者による)。(東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』学校法人東洋大学、一九八八年、一〇二頁。
- (9) 「館外員」は私立哲学館に通学できない者のために明治二二年に創設された制度で(創設時は館外生と称したが同年中に変更)、テキストである『哲学館講義録』を購読し、試験を受けることで合格者には科目の修学を証明する書類が与えられた。同制度については『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』九七〜一〇八頁を参照。
- (10) 井上円了の妖怪学については『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』五四頁、一九四〜二〇〇頁を参照。それによれば、中田龍堂の私立哲学館普通科在籍中には明治二三年四月に開講した第一回の日曜講義で話された「妖怪総論」があり、哲学高等科在籍中には明治二六〜二七年にかけて発行された『哲学館第七学年度講義録』ではすべて井上円了の妖怪学に関する講義が掲載された。
- (11) 『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』一九六頁。
- (12) 『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』一八頁。

- (13) 野田醤油株式会社社史編纂室編『野田醤油株式会社三十五年史』野田醤油株式会社、一九五五年、九六頁。
- (14) 『国指定名勝高梨氏庭園 昭和の改修記録 二八代主の美学』財団法人高梨本家上花輪歴史館、二〇〇四年、一〇〜一一頁。
- (15) キッコーマン株式会社『キッコーマン株式会社八十年史』キッコーマン株式会社、二〇〇〇年、六七〇頁の「資料」『工場、出先営業部門等の変遷』を参照。
- (16) 『野田醤油株式会社三十五年史』二〇七頁。
- (17) 建物の詳細については、『野田市市民会館建物基本調査結果報告書』野田市民生経済部市民課、二〇〇〇年を参照のこと。
- (18) 村松貞次郎・近江榮編『近代和風建築』鹿島出版会、一九八八年、七六〜七七頁。「野田市市民会館」の項目(大川三雄・述)。
- (19) 『野田市市民会館建物基本調査結果報告書』野田市民生経済部市民課、二〇〇〇年。なお、野田醤油株式会社(現・キッコーマン株式会社)は、高梨兵左衛門家、茂木七左衛門家、茂木佐平治家、茂木七郎右衛門家、茂木房五郎家、茂木勇右衛門家、茂木啓三郎家、堀切紋次郎家の一族八家の合同により創業した「キッコーマン株式会社八十年史」一八頁、七九頁。
- (20) 市山盛雄編『野田醤油株式会社二十年史』野田醤油株式会社、一九四〇年、一〇七頁。
- (21) 『野田醤油株式会社二十年史』一四頁。
- (22) 『野田醤油株式会社二十年史』一七頁。『野田醤油株式会社三十五年史』一一二頁。
- (23) キッコーマン株式会社編『キッコーマン株式会社八十年史』キッコーマン株式会社、二〇〇〇年、六七〇頁の「資料」『工場、出先営業部門等の変遷』を参照。
- (24) 倉岡衛編『若吉どん九十一年の生涯―戸邊織太郎追憶録―』戸邊織太郎翁追憶録刊行会、一九七七年。巻末の、「年譜―略歴と九十一一年間の主な出来事―」を参照。
- (25) 平成二八年度特別展図録「生誕一四〇年 染谷亮作と川間村―農業と教育の理想を目指して―野田市郷土博物館、二〇一六年、四五頁。当館所蔵「染谷静男家文書資料 番号六二六一―A―一〇二三。当館所蔵「チラン」(野田・清水公園のいちごつみ)資料 番号八九〇二。
- (26) 上花輪・新井敏之家文書「明治四十年第三種所得金額申告扣」(資料番号八八二四―四三、新井敏之氏寄託)。なお、後年に子息の新井一郎が「小三郎」を名乗るが、同文書群中には昭和九年の資料に「新井一郎」名が見られることから、一朗の父の小三郎であると考えられる(昭和六年乃至九年事変従軍記章之証 資料番号八八二四―一五)。
- (27) 上花輪・新井敏之家文書には、空き樽の注文のために柳常八商店が新井小三郎に宛

を開始している<sup>註22</sup>。株式会社創業時に「しょうゆ部門」は野田醤油の第一工場（一九一九年に万上味醂株式会社に編入）、「みりん部門」は万上味醂株式会社となった（一九二五年に野田醤油株式会社万上味醂部となる）<sup>註23</sup>。なお、表中の堀切紋次郎は年代から七代当主であると思われる。

そのほかの野田在住の差出人についても、簡単に紹介したい。まず、榎田定吉と戸邊五右衛門は、それぞれ今上河岸（野田下河岸）、中野台河岸（野田上河岸）で回漕業を営んでおり、醤油の原料および製品の輸送に携わっていた人物である。

戸邊織太郎（一八八五～一九七六）は、野田市の市制施行時に野田市長となった人物として知られているが、一〇歳の頃より醤油醸造家の茂木房五郎家へ奉公に上がり、大正六年の野田醤油株式会社創業以降は、昭和七年に退社するまで、同社の社員として勤めていた経歴を持つている<sup>註24</sup>。

柳常八は川間村中里の旧家で代々苗木や肥料を扱っていた人物で、昭和四年に開園した清水公園第二公園の植樹を担当したという。清水公園内に約二万坪のいちご園を経営しており、いちご狩りは昭和初期における清水公園の名物であった<sup>註25</sup>。

新井小三郎は、明治期より野田で明樽商を営んでいた人物で<sup>註26</sup>、前述の柳常八とは商売上の取引き関係にあったようである<sup>註27</sup>。そして、「新井小三郎方」の新井次郎は小三郎の子息になるという。新井次郎が宛てた葉書も、中田龍堂との関わりを窺うことができる内容なので、その文面を次に挙げておきたい。

#### 《資料4》

拝啓、本日ハ態々御立寄種々御世話に相成り難有存じ候、尚ほ少々御話参り度義有之、来ル十一月四日午前中御伺いたし度二付御在宅願上候、

十月廿八日

草々

鈴木又七は、野田醤油株式会社によって作成された「大正七年度樽屋名簿」の中に、醤油醸造家・茂木七郎右衛門家に納入していた「樽芳 鈴木又七」として名前が見られる<sup>註28</sup>。

昭和三年に千葉県議會議員に政友会から当選した人物である高梨忠八郎が差し出した葉書は、那須塩原温泉の絵はがきで、通信欄に「当地塩の湯ハ気候余りに冷気にて私ハ神経痛を病み却て困難いたし候二付去る七日一先つ当地を引上げ海岸地方へ転居するつもりにて途中郷里に立寄り申候」と記されている<sup>註29</sup>。この葉書は、療養のために那須にいた高梨忠八郎が転居をする際のもので、家相の鑑定についての言及はないが、中田龍堂との親交を窺うことができ、顧客の一人だった可能性がある。その他の二名については現時点では詳細が判明しておらず、引き続き調査を進めていく。

#### 今後の課題

本稿では、大正～昭和初期にかけて家相見として活動を行った中田龍堂について、その経歴と野田における家相見の活動の一端を紹介した。高梨兵左衛門家以外にも、茂木佐平治家など他の醤油醸造家において中田龍堂が家相などを占っていたことを窺わせるものであった。さらに回漕業や製樽業など、その他の醤油醸造業に関わっていた人々も中田龍堂との繋がりがあったことが明らかになった。

とは言え、今後の課題は多い。本稿で紹介した野田と流山以外の差出人についても調査を行い、中田龍堂の活動について解明していく必要がある。また、迷信の打破を目指していたとされる井上円了の妖怪学研究は、家相見としての中田龍堂にどのような影響を与えたのであろうか。中田龍堂に関する調査は端緒にいたばかりである。

にあたる茂木七左衛門家から元禄元年（一六八八）に分家し、天明二年（一七八二）より醤油醸造業を営んでいた<sup>（註16）</sup>。後に野田醤油株式会社の商品となる「キッコーマン」は、当家の本印として江戸時代より用いられていたものである。中田龍堂が関わったと考えられる茂木佐平治家の住宅は、平成九年に「野田市市民会館（旧茂木佐平治家住宅）主屋ほか」として国の登録有形文化財となつている<sup>（註17）</sup>。この建物と中田龍堂との関わりについては、現存する近代の木造建築について「近代和風建築」として評価し紹介した『近代和風建築』のなかで、「建物の完成は大正一〜一三年ころといわれる。おそらく家相の相談役としてであろうが古い師・中田竜堂の名が伝えられている。大工棟梁・神原鍋太郎はこの仕事の最中に事故で命を落としている。」と記されているのみであつた<sup>（註18）</sup>。

中田龍堂関係資料には、同家に関わる資料として、葉書のほかに、上棟式記念の枡（後掲写真参照）が含まれている。この枡には墨書で「大正十一年一月五日 茂木家上棟式」「棟梁神原鍋太郎、同岡本善次郎」と記されている。一九九九年に行われた聞き取り調査では、上棟式は大正五〜一年のうちに行われ、棟梁は「竹本善太郎」であつたとされているが<sup>（註19）</sup>、葉書の存在と先ほどの『近代和風建築』の記述を併せると、本資料中の墨書「茂木家上棟式」が茂木佐平治家に該当する可能性は十分にあると思われる。

続いて、差出人が中田龍堂の顧客として関わつていたことが窺える葉書を二点紹介したい。茂木房五郎が差し出した葉書の文面は次のとおりである。

#### 《資料2》

拝啓、時下御免下され度候、扱々日増に良き時候に相成候処、先生様には其の後御機嫌如何遊され候哉御伺ひ申上候、就ましては新築の件に候へ共来年の十月までには全部仕上げられる事なれば仕上げて移転を致した方がよろしいのでせうか、若し都合に依りましたら或る一部分だけでも全部仕上らなくとも差つかい御座いませぬか、毎度御手数数恐入候へ共御調べを下さいますして御返事を下され度願ひ上候、

先は不取敢御願ひまで、

草々

これは茂木房五郎が中田龍堂に対して、住宅の新築に伴う移転の時期について伺いを立てている内容である。茂木房五郎家は、文政四年に茂木七郎右衛門家から分かれた家で、安政二年に野田の醤油醸造発祥といわれる飯田市郎兵衛の亀屋蔵を借り受けて醤油の仕込みを始め、「ミナカミ」を本印とした家である。西藏・東蔵・恵比寿蔵を有しており、株式会社創業後にそれぞれ第五工場・第四工場・第一八工場となった。なお、後掲の表中に茂木和三郎の名前が見られるが、同家は明治三九年に房五郎家から分かれた家である<sup>（註20）</sup>。

続いて、流山町の堀切あさが差し出した葉書を紹介する。

#### 《資料3》

拝啓、先生其後如何ニ凌かせられ候や、とかく御あんじ申居候処、先日野田へ参り候折先生の御様子伺候へば、御全快御床払の由御目出度存上候、ぜひ春暖かなる相成候へば御光来の程御待申上候、猶今日私宅兩人高梨御占下され難有御厚礼申上候、いつれ御目もじ何かと万々申候へ共、日増寒気烈しく相成候故御身体御大切のやう御願申上候、御令聞様へよろしく御伝願奉候、

流山町 堀切あさ

堀切あさは、高梨兵左衛門家より明治一四年に分かれた高梨政之助家から流山の六代堀切紋次郎へ嫁いだ人物である<sup>（註21）</sup>。後掲の表中には高梨政之助の名前も見られる。

堀切紋次郎家は、明和三年（一七六六）に堀切浅右衛門家より分れて流山に移住し、三代茂木佐平治の次女を娶つて興した家である。酒・醤油・みりの醸造を行つており、特に白味噌は高梨家の支援を得て文化一一年に発売

大学卒業後の明治一九年に同学内で不思議研究会を発足し、私立哲学館を創立した後も妖怪学に関する講義を行い、その内容を講義録や講演集として発行している<sup>(註10)</sup>。

井上円了は妖怪学を八つの「類」に分け、そのなかに細かい「種」を設けて分類しているが、そのうちの第四類「純正哲学部門」に「偶合篇」「陰陽篇」「占考篇」「卜筮篇」「鑑術篇」「相法篇」「曆日篇」「吉凶篇」を設けている<sup>(註11)</sup>。明治二六年一月には私立哲学館内に妖怪研究会が設立され、明治三三年四月からは『妖怪学雑誌』の発行が開始される。その第一号に掲載された会則の第三条(科目)では、「凡ソ四百余种」ある研究項目のうち三〇項目を挙げており、そのなかには「陰陽」「五行」「家相」「鬼門」「方位」「吉凶」「禍福」が含まれている<sup>(註12)</sup>。妖怪研究会の主な研究として家相師として必要な項目が挙げられているのであり、明治三二年より「易学及家相学研究ノ為メ諸国ヲ遊歴」していた中田龍堂も妖怪研究会に何らかの形で関わっていたのかもしれない。

「履歴書」は大正一四年までしか記載がないが、寄贈者からのご教示によれば、中田龍堂は、昭和一〇年に持病の養生のため福島県石城郡の鮎泉「神泉亭」のほど近くに自らの設計で別荘を建て余生を過ごし、昭和一一年(一九三六)一月三〇日に亡くなっている。

### 中田龍堂と醤油醸造家

続いて、中田龍堂が家相見として野田でどのような活動を行っていたのか、確認してきたい。本稿の冒頭で述べたように、中田龍堂関係資料の寄贈を受ける以前に鑑定を行ったことが判明しているのは、醤油醸造家の高梨兵左衛門家の住宅である。高梨兵左衛門家は、大正六年(一九一七)に野田醤油株式会社(現・キッコーマン株式会社)を創業した野田・流山の醤油醸造家八家に含まれる旧家である。ここで同家の家相図と中田龍堂の関わりについて触れておきたい。

高梨兵左衛門家は、古くから上花輪(現・野田市上花輪)の地に居住し、江戸時代は上花輪村の名主であり、寛文元年(一六六一)より醤油醸造業を営ん

できた家である<sup>(註13)</sup>。高梨家には文政一〇年(一八二七)、天保六年(一八三五)、大正七年、昭和五年の「屋敷絵図」(家相図)が残されているが、そのうち大正七年「一家相百分一縮図 高梨家本邸」を作成した人物が中田龍堂であった<sup>(註14)</sup>。

野田醤油株式会社の創業は、それぞれが「家業」として個別に経営を行っていた醤油醸造家に、大きな変化をもたらしたものと思われる。高梨兵左衛門家では昭和三〇六年にかけて大規模な住宅の改修が行われているが、これはそれまでの店舗兼住宅から私的住宅へ、「職任分離」を達成することを目的としたものであった。その前の大正七年に中田龍堂によって行われた家相図の作成は、現状の家運を鑑定することに主眼が置かれていた。天保六年と大正七年の家相図を比較すると、住宅自体の相違点のほかに、住宅脇の醤油蔵が大正七年の家相図から除かれ、記載範囲が変化している点が挙げられる。現在、高梨本家上花輪歴史館の駐車場となっているこの場所は、高梨本家個人経営時代はジョウジュウ本蔵で、株式会社創業後は第一工場となった<sup>(註15)</sup>。野田醤油株式会社の創業は、二五〇年以上にわたって続いてきた高梨兵左衛門家の「家業」の形態とともに、実質的な屋敷地の範囲にも変化をもたらした。自家の家運を鑑定するために天保六年以来、八三年ぶりに家相図を作成させる契機となった出来事だったと言えるだろう。

中田龍堂関係資料には、中田龍堂に宛てられた六四通の葉書が残されており、この中に、差出人の住所が野田町、または流山町の葉書一七通が存在している(末尾に掲載の《表》野田・流山居住者から中田龍堂に差し出された葉書一覧、を参照)。

葉書の内容は、年始の挨拶や暑中見舞いなどが一文で簡潔に記されたものを中心であるが、中田龍堂の顧客としての関わりを窺わせる内容のものも含まれている。現在判明している範囲ではあるが、差出人について紹介している。

高梨兵左衛門家については前述のとおりであるが、続いて、茂木佐平治家について触れる。同家は野田町(現・野田市野田)の醤油醸造家であり、本家

一 大正四年十月、東京府下渋谷町下渋谷伊達跡一七九三地二家相専門ノ鑑定ヲナス、

一 大正十年四月「ヨリ」現住ニ至リ於テ家相専門ノ鑑定ヲナス、

〔頭注\*〕賞罰

小学校奉職中賞金数回受ク

一 罰ナシ

文久二年（一八六二）に生まれた中田龍堂（本名・辰蔵）は、明治三二（一八九八）年に諸国遊歴の旅に出るまで、福島県内の小学校に勤めており、家相見として活動を開始したのは千葉県山武郡大網町を拠点に易断および家相の鑑定を始めた明治三五年であることがわかる。中田龍堂が拠点に選んだこの地には、妻の実家があったという。ただし、このときは漢学を教える私塾を開いていたようであり、東京に拠点を構え「家相専門ノ鑑定」を始めたのは大正四年（一九一五）からであった。

ここで中田龍堂の活動拠点について付言しておきたい。「履歴書」の記述によれば、大正四年に東京府下渋谷町に移るまでは千葉県山武郡大網町を本拠として活動していたことになっているが、必ずしも、そうではなかったようだ。中田龍堂関係資料には家相図が四点含まれている。鑑定の依頼者はすべて、中田龍堂が明治三五年に拠点を置いた千葉県山武郡の住民で、作成年は三点が明治三六年、一点が明治四三年である。家相図に署名された中田龍堂の居所に注目すると、明治三六年に作成された三点には、いずれも「東京下谷区谷中初音町住」、明治四三年の一点は「上総大網住」と表記されているのだ。東京の下谷区谷中について「履歴書」には記載がないため、活動の本拠は大網町にあったと思われる。その一方で、この時点で東京にも拠点を持っていたことは、中田龍堂が千葉と東京で活動を並行して行っていたことを示唆している点で興味深い。後述するように、中田龍堂は大正半ばから昭和初頭にかけて、野田において醤油醸造家の家相図を作成するが、東京にも拠点を

置いていたことは、その機会を得た要因の一つとして挙げられるかもしれない。

さて、中田龍堂の経歴のなかで注目されるのは、明治二二年の私立哲学館への入学である。私立哲学館は、明治二〇年九月に学校法人東洋大学の起源として本郷に創立した私立学校である。創立者の井上円了は、安政五年（一八五八）二月に新潟県にある寺院の住職の子として生まれている<sup>〔註〕</sup>。住職の後継者として得度し真宗大谷派の僧籍を取得し、京都に設立された真宗大谷派の教師学校から東京留学生として明治一一年に東京大学予備門に入学、一四年に東京大学文学部哲学科に入学、一八年に卒業、教団からの要請を固辞し、私立哲学館の創立に至る。

私立哲学館は、哲学を学ぶことが出来る場所が帝国大学に限られていた現状に対して、「帝国大学の課程のような長い修学期間を経過するほどの資力を持たないもの、あるいは原書を解するだけの語学修得の時間的余裕のないもの」のために開校するという趣旨であった<sup>〔註〕</sup>。当時の哲学館生は、一年から三年まで必修として東洋部と西洋部の両方の学科目を受講する必要があり、東洋部には日本学・支那学・印度学の三科目、西洋部には社会学・倫理学・教育学・純正哲学などが存在していた<sup>〔註〕</sup>。

中田龍堂の「履歴書」には「日本哲学・支那哲学・印度哲学・西洋哲学」と記されており、「西洋哲学」については判然としないものの、その他については東洋部の三科目が該当するものと思われる<sup>〔註〕</sup>。なお、「履歴書」には私立哲学館での修学前後に福島県内の小学校に勤めていた記述がある。私立哲学館では、東京の校舎に通い受講する「館内員」のほかに当時から「館外員」という通信教育の制度が存在しており、中田龍堂の修学が同制度を利用したものであった可能性もある<sup>〔註〕</sup>。

また、小学校に勤めていた中田龍堂がどの時点から家相見を目指すことになったのか、そのきっかけなどは不明であるが、私立哲学館での修学がその後の中田龍堂に影響を与えたことは間違いない、そのなかでも否応なく想起されるのが井上円了による妖怪学研究との関連性であろう。井上円了は東京

野田における家相見・中田龍堂の活動——中田龍堂関係資料から——

寺内 健太郎（野田市郷土博物館学芸員）

はじめに

家相説とは、「屋敷地の形状やそこに植えられる樹木、あるいは住宅・付属建物・屋内施設・屋外施設について、地形や位置、時間の運行などから、そこに居住する人々の幸福を招き同時に災厄を未然に防ぐことを目的とする考え方」と定義されている<sup>〔註1〕</sup>。屋敷地、家屋やその付属施設などの平面図に、方位ごとの吉凶判断を記したものが家相図で、家相見、または家相師、方位師などと呼ばれる人々によって作成された。村田あがによると、江戸時代の家相見については松浦東鷄、松浦琴鶴などが主に家相書の著者として紹介されている<sup>〔註2〕</sup>。

近代以降の家相見の活動については、宮内貴久が主に明治二〇〜三〇年代末にかけて山形県置賜地方で家相見を行った渋谷常蔵（一八六九〜一九三二）を事例に、自らが著した『渋谷常蔵一代記』や作成した家相図、および蔵書の内容などを分析している<sup>〔註3〕</sup>。家相見としてのキャリア形成から家相図作成の経緯のみならず、その住居観などまで詳細に検討を行っている。

本稿で紹介する中田龍堂は、野田の醤油醸造家・高梨兵左衛門家に残された家相図の作成者としてその名前が知られていたものの<sup>〔註4〕</sup>、どのような人物であったのか、その生没年なども含めて不明な点が多かった。しかし、平成二九年、中田龍堂の子孫の方より、家相見として活動を行っていた際の文書や判子などの資料について、「中田龍堂関係資料」（資料番号九二一九）として寄贈を受けたことから、中田龍堂の経歴などが判明することとなった。

そこで本稿では、まず、中田龍堂がどのような経歴によって家相見として活動を行ったのかを「履歴書」から確認する。続いて、野田の醤油醸造家などとの関わりについて、中田龍堂に宛てられた葉書を用いて検討を行う。

中田龍堂と私立哲学館

まず、中田龍堂とはどのような人物であったか、その経歴に関する資料として「履歴書」を紹介する。

《資料1》

履歴書

原籍福島県石城郡小名浜町古港

現住東京府豊多摩郡

中 田 辰 蔵

落合町下落合

文久二年五月十五日生

- 一 明治三年五月、福島県石城郡小名浜町私立弘文塾二入り漢学ヲ修習ス、
- 一 明治十九年三月、福島県南会津郡旭田村公立音金小学校授業生ヲ拜命ス、月給金参円五拾銭ヲ給セラル、
- 一 明治二十二年九月十五日<sup>〔註5〕</sup>、東京本郷区龍岡町私立哲学館二入り日本哲学・支那哲学・印度哲学・西洋哲学ヲ修学ス、
- 一 明治二十<sup>〔註6〕</sup>年七月、哲学普通科卒業、
- 一 明治二十五年九月、哲学高等科二入り支那哲学ヲ専修ス、
- 一 明治二十七年八月<sup>〔註7〕</sup>、福島県南会津郡旭田村公立音金小学校助教員ヲ拜命シ月給金七円ヲ給セラル、
- 一 明治三十一年、易学及家相学研究ノ為メ諸国ヲ遊歴ス、
- 一 明治三十五年、千葉県山武郡大網町私塾ヲ立テ漢学ヲ教授ス傍、易断<sup>〔註8〕</sup>及<sup>〔註9〕</sup>家相ノ鑑定ヲナス、

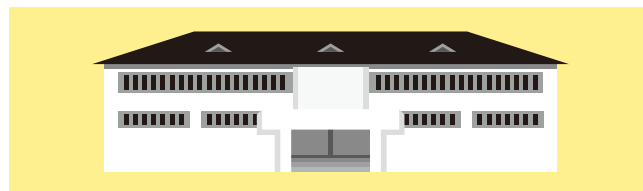
野田市郷土博物館 市民会館  
年報・紀要 第13号 2019年度

発行日 令和3年3月31日  
編集発行 野田市郷土博物館・市民会館  
指定管理者 野田業務サービス株式会社  
〒278-0037 野田市野田 370-8  
電話 04-7124-6851  
FAX 04-7124-6866  
印刷 野崎印刷株式会社

Noda City Museum  
Civic Center

# ANNUAL REPORT & BULLETIN

*April 2019- March 2020*



Noda City Museum / Civic Center

